
愛しき願い

雪原歌乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しき願い

【Nコード】

N6622V

【作者名】

雪原歌乃

【あらすじ】

此方は長編現代和風幻想『夢現に舞う』南條×美咲（美咲視点）の話となっております。

本編との関連は殆どございません。

PG12指定。

（前書き）

此方は長編現代和風幻想『夢現に舞う』南條×美咲（美咲視点）の話となっております。

本編との関連は殆どございません。
P G 1 2 指定。

八月も下旬に入り、少しずつ、秋に近付きつつあった。しかし、
燦々と降り注ぐ太陽は相変わらずで、熱さから解放されるのは、ま
だまだ先になりそうだ。

「それにしたって、馬鹿みたいにあつついわねえ」

手に持ったハンカチを団扇代わりに煽ぎながら、口を半開きに
した江梨子がぼやく。

「まあ、夏ですからね」

そう受け答えしつつ、美咲も内心、異常なまでの暑さにうんざり
していた。

ちなみに、彼女達が今いる場所は、市内にあるコーヒーショップ。
江梨子から、『たまには外でお茶しない？』という誘いを受けて
出て来たのだが、その呼び出した張本人が、美咲以上にだれている。
だったら、ずっと家で大人しくしてればいいものを、と思ったが、
江梨子に対しては、余計な事は言ってはいけないという暗黙のルー
ルがあるため、突っ込みは、心の中だけに留めている。

（江梨子さんを上手く扱えるのって、旦那さんの樋口さんぐらいだ
しね……）

江梨子に気付かれない程度にひっそりと溜め息を吐いた美咲は、
黙々と、アイスミルクティーを啜った。

「あ、そうそう美咲ちゃん」

江梨子は、ハンカチで煽ぐのを中断してから身を乗り出してきた。
美咲は、ストローを咥えたまま、訝しく思いながら江梨子に視線
を注ぐ。

「もうじき、南條君の誕生日なのよ」

「南條さんの誕生日、ですか？」

おうむ返しに訊ねる美咲に、江梨子は、先ほどとは打って変わっ
た満面の笑みで、「そうよお」と大きく頷いた。

「彼の誕生日は今月の二十三日。丁度一週間後ね。あいつの事だから、誕生日なんて全く意識してないだろうけど、美咲ちゃんが祝ってあげたら絶対に喜ぶわよお！」

江梨子は何を思ったのか、突然、独りで盛り上がり出した。

美咲も、最近は江梨子の人となりが分かってきたので、きつと、打っ飛んだ妄想をしているに違いない、とすぐに察した。同時に、小さな溜め息が漏れた。

「——江梨子さん、何を期待してるんですか？」

この位ならば突っ込んでも良いだろうと思った美咲は、すかさず訊ねた。

しかし、江梨子は、「さあねえ」と、わざとらしく首を傾げる。

（やっぱり、この人には絶対敵わない……）

美咲も、これ以上は何も言う気になれなかった。

江梨子と別れ、家に帰ってから、美咲はすぐに自室に入った。

窓を開けて行ったものの、それでも、ムツとした熱気が部屋中に蔓延している。

「さすがに、自分の部屋もエアコン入れてよ、何て贅沢は言えないもんね……」

美咲は独りごち、扇風機のスイッチを入れた。全身が汗ばんでいたから、最初は風が心地良かったが、汗が引くにつれ、今度は逆に生ぬるさを感じる。

（やっぱ暑いもんは暑いわ……）

恐らく、今の美咲は、さっきまで一緒にいた江梨子と同じ表情をしているはず。目は虚ろで、口もポカンと開いていた。

（南條さんはどうなのかな……？）

そんな事を考えながら、バッグから携帯電話を取り出し、殆ど無意識に南條に電話する。

コール音は三回鳴り、それから、『もしもし？』と、心地良いバリトンが耳に響いた。

そこで、ぼんやりとしていた美咲の頭も急に冴えた。

「あ、こんにちは。美咲です。こんにちは」

我ながら、突っ込み所満載な挨拶だ、と呆れた。

『どうした？ 何かあったか？』

動揺している美咲とは対照的に、落ち着き払った口調で南條が訊ねてくる。

美咲は、顔の見えぬ相手に、「い、いえいえ！」と慌てて首を横に振った。

「何でもないんです。——ちょっと、南條さんと話したかっただけで……。」

あの……、迷惑でしたか……？」

恐る恐る訊くと、南條からは、笑いを含んだ声で『いや』と返ってきた。美咲の緊張が伝わってしまったのだろうか。

『俺も丁度、美咲に電話しようと思っていた所だったから』

「えっ……！」

南條の言葉に、美咲の鼓動が高鳴るのを感じた。同時に、私と南條さんは、見えない糸で繋がっているのかも、と、いかにも 恋する乙女 な幻想まで抱いてしまう。冷静になってみると、そんな発想は非常に恥ずかしくて滑稽なものなのだが。

「えっと、南條さんこそ、私に何か用があったんですか？」

言ってしまってから、何か嫌な言い方だとは思ったが、南條の方は、全く意に介していない様子で、やはり、先ほどと変わらぬ平淡な口調だった。

『用？ まあ、用があると言えばあるかな』

「どんな用ですか？」

美咲が重ねて訊ねると、今度は、南條からの返答に、わずかではあったが間が空いた。

『美咲』

「はい」

躊躇いがちに紡がれた南條からの一言に、美咲は、思わず目を見

開いてしまった。

『二十三日は暇か？』

一週間後の八月二十三日。この日も朝から見事な晴天に恵まれ、日中は、ジリジリと焦げ付くような暑さと湿気が同時に襲ってきた。そんな中、美咲は自室で、いそいそと出かける準備を整える。背中まで伸びた髪は、見た目にも鬱陶しさを感じさせないように一つに纏め、服装も、キャミソールにスカートと、基本的にラフな格好を好む美咲にしては、相当気合いが入っている。

（でも、ちよつと浮かれ過ぎ……？）

自分の今の姿を、全身鏡に映しながら、不意に思った。しかし、少しでも南條に意識して貰いたいという意識の方が強く働き、最終的には、その 浮かれた姿 で出向く事に決めた。

「あ、そうだ」

美咲は部屋を出かけて、肝心な物を想い出した。

机の上に置かれた、一抱えほどの紙袋。その中には、三日前に南條への誕生日プレゼントとして買ったＴシャツが入っている。もちろん、剥き出しの状態ではなく、店で綺麗に包装、ワンポイントとして、青いリボン付きのシールも貼って貰った。

Ｔシャツ自体は決して高い物ではないが、一番大切なのは気持ちなのだ、江梨子にもアドバイスされた。

『美咲ちゃんからのプレゼントなら、南條君はどんな物でも喜んで貰ってくれるわよ！』

江梨子はそうも言っていた。

「気持ちが一番大切、か」

バッグを肩にかけ、紙袋をそつと抱き締めると、美咲は小さく笑みを湛えながら部屋を後にした。

待ち合わせ場所の最寄り駅に行くと、南條は既に待っていた。

美咲は、ミュールのヒール音を小気味良く響かせながら、南條の元へと駆け寄る。

その足音にすぐ気付いた南條は、こちらを見るなり、穏やかな眼差しを向けながら微笑した。

「あんまり慌てるとコケるぞ？」

開口一番、美咲をからかってくる。

美咲は唇を尖らせ、「大丈夫ですよ」と上目遣いで睨んだ。

「私、南條さんが考えてるほどドジじゃありませんから」

そう言う美咲の顔を、南條は、さも面白そうに眺める。口には出してこなかったが、お前は十分おっちょこちょいだ、と、完全に思われている。

（もう……。未だに子供扱いって……）

不満を露わにして俯き加減になっている美咲の肩を、南條がそつと触れてきた。

「ここにいつまでもいても仕方ない。そろそろ行くぞ？」

南條に促され、美咲は、彼と並んで、再び出口に向かった。

美咲と南條は駐車場へ行き、南條の車に乗り込んだ。

「どこか行きたい所はあるか？」

訊かれたものの、プレゼントを渡す以外の事を考えていなかった美咲は、返答に窮した。

「どこでもいいです」

随分と無愛想な言い方をしてしまったが、南條は気分を害した様子はなく、寧ろ、小さく笑みを浮かべたほどだった。

「なら、俺の気紛れに付き合っただけで貰うか」

南條の言葉に、美咲は黙って頷いた。

車に乗り込んでから三十分。その間、美咲は車窓から流れる景色を眺め続けた。

ずっと無言だったわけではないが、南條は、それほど口数が多い方ではないから、会話をしても長続きしない。

だが、美咲はそれを苦痛だとは全く感じていない。美咲も、どちらかと言うと騒がしいのはあまり得意ではないし、南條と静かな時間を共有出来るのは、かえって心が安らぐ。他の人間——殊に、雅通がいたら、とてつもなく騒がしくて落ち着いてはいられない。もちろん、それもそれで良いと思うのだが。

「疲れたか？」

不意を突いて南條に声をかけられ、美咲は、ハッとして運転席に頭を動かした。

ハンドルを握っている南條は、美咲を一瞥し、視線が合うと、すぐ前に向き直った。

「眠いなら無理するな」

どうやら、睡魔と闘っていると勘違いされたらしい。

美咲は、「いえ」と、半ば慌てて否定した。

「全然眠くないので大丈夫です。ただ、外の景色に見入っていただけで」

「ほんとか？」

「ほんとです」

南條は再び、チラリとこちらを見る。その口許を見れば、予想通り、わずかに口角が上がっていた。

「本当に遠慮するな。眠いのを我慢される方が、こっちもかえってしんどくなる」

「あ、はい」

ほんとに大丈夫なのに、とは思ったものの、南條の心遣いに水を差す気もなかったので、口には出さずにいた。

また、二十分ほどが経過した頃だった。

あれからずっと、外を眺め続けていた美咲だったが、先ほどまでとは変わった景色が現れた途端、目を瞠った。

そこには、色彩豊かな花が所狭しと咲き誇っている。

何の花なのかと思っただけで見てみると、それは全てコスモスだった。

「凄い……」

思わず呟いたのとほぼ同時に、南條は、車を路肩に寄せて停車させた。

美咲は、驚いて南條を振り向くと、微笑する彼と視線が重なった。

「もしかして、これを見せるために……？」

南條は、「ああ」と頷いた。

「この辺はいつも俺のドライブコースだったから、ここも、美咲と逢う前から知っていた。と言っても、俺はあんまり花に興味はなかったんだが。」

でも、この間、美咲と電話で話していた時に、フツとこの事を思い出したから、折角だし、お前にもコスモス畑を見せてやろうと思ったわけだ」

柄じゃないけどな、と苦笑いする南條に、美咲は、大袈裟なほど首を横に振った。

「そんな事ないです！　ほんとにすごく綺麗じゃないですか！　私、花はそんなに詳しくないけど好きですから、南條さんにここに連れて来て貰えてとっても嬉しいですよ！」

つい、興奮して一気に捲し立ててしまった。

そんな美咲を、南條は、わずかに目を見開いて見つめていたが、やがて、先ほどと同じ柔らかい笑みを向け、更に、彼の元へ、美咲を身体ごと引き寄せた。

「な、南條さん……？」

予想外の事に、美咲の全身は一気に熱を帯びる。十分に冷房の利いた車内にいるのに、灼熱の外気に曝されているような、そんな心地がした。

「どうした？　顔が赤くなってる」

「——誰のせいだと思ってるんですか」

分かってるくせに、と、南條を上目遣いで睨むと、南條は、意地

悪くクツクツと喉を鳴らして笑う。

「——南條さん、私をからかうのって面白いですか？」

憮然として訊ねる美咲に、南條はわざとらしく、空いている方の手で自らの顎に手を添えながら、考える仕草を見せた。

「何て言って欲しい？」

今度は、逆に訊き返されてしまった。

「な、何て、って……」

南條が期待する答えは、何となく分かるような気がする。しかし、そう軽々しく言えるような事じゃない。

（南條さんにおんなじ質問をしたって、結局また、おんなじように返されるに決まってるし……）

南條の腕の中で、散々考えた挙げ句、美咲は意を決した。

「——」からかつてるわけじゃない。俺は、美咲を『……』

南條の口調を真似、恥ずかしいのを堪えて言いかけた言葉は、その当人の口付けによって封じられた。

口を塞がれた美咲は、最初は驚きつつ、だが、少しずつ力を抜き、彼からの愛情を全身で受け止める。車中とはいえ、白昼堂々何をやっているのかと、冷静なもう一人の自分に咎められたが、そんな理性は、あっさりと振り払われてしまった。

南條の口付けは、美咲の身も心も酔わせてしまう魔力がある。深さを増すたびに、どうなっても良いと思ってしまうが、南條は絶対に、それ以上の事はしない。誰もいない、密室で二人きりの状態になったとしても、だ。

長いようで短いキスは、南條が唇を離れた事で終止符を打った。

美咲としては、まだまだ物足りなさを感じていたが、南條の心情も分かっているので、我が儘など言えるはずもない。それに、南條は美咲を大切だと想ってくれているからこそ、彼女を傷付けるであろう行為に走ろうとしないのだ。

「やれやれ」

美咲を開放した南條は、深い溜め息を吐いた。

「場所も時も考えずに突っ走ってしまふようじゃ、俺もまだまだって事が……」

そう呟く彼は、自らを嘲っているように映る。

美咲は、南條に向かつて口を開こうとして、止めた。その代わり、先ほどのキスの余韻を振り切るように、座席とドアの間に挟めていた紙袋——南條へのプレゼントへ手をかけた。

「南條さん、これ……」

やや落ち込み気味の南條の膝に、美咲は紙袋を置く。

南條は、紙袋の両側面を持ちながら、不思議そうに、美咲とそれを交互に見比べた。

「これは？」

「誕生日プレゼントです。今日、南條さんの誕生日だって、江梨子さんに聞いたから……」

「え？——ああ、そう言えばそうだったか」

「まさか……、忘れてたんですか？」

「忘れていたという以前に、誕生日がいつだったかすら憶えてなかった」

南條のこの言葉に、美咲は啞然とした。

忘れていただけではなく、誕生日の存在すら憶えていないというのは、無頓着にもほどがあり過ぎる。確かに、南條らしいと言えなくもないが。

「——どうやって自分の歳を記憶し続けたんですか？」

つい、素朴な疑問を投げかけてしまった。

そんな美咲に、南條はサラリと言ったのけた。

「正月がくれば、自動的に歳も取るだろう。それと免許更新の葉書も大体の目安になる」

「——そういうもんですか……」

ここまで、無関心を露わにされてしまうと、南條の事を考えながらプレゼントを選んでいた自分が、非常に馬鹿らしく思えてくる。

（やっぱり、浮かれてたのは私だけだったんだ……）

南條から視線を外し、美咲は俯いた。

と、その時だった。隣から、カサカサと紙の擦れる音が聴こえてきた。

美咲は顔を上げず、チラリと南條を一瞥すると、彼は、徐に包装紙を押さえるテープを剥がしていた。

不意に、南條と目が合った。

「ありがとう」

南條の口から、感謝の言葉が紡がれる。

「美咲からの気持ち、しっかり受け止めさせて貰ったよ」

南條は、美咲の髪に優しく触れた。それは、先ほどのキスよりも甘美で、仄かに温かさを感じさせる。

美咲もやっと、笑みを取り戻した。顔を上げて、南條を真っ直ぐに見つめる。

「ちゃんと着て下さいね？ ただダンスの奥に仕舞われてるだけじゃ、Ｔシャツも不本意でしょうから」

「ああ。仕舞いつ放しにしないようにするよ」

美咲から念を押されてしまった南條は肩を竦め、続けた。

「次は美咲の誕生日に、更に俺の気持ちを贈ってやらないとな」

車の外で、残暑の微風に乗って、コスモスが一齐に揺れる。

生きとし生ける、全ての幸福を願うように――

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6622v/>

愛しき願い

2011年9月30日03時29分発行